著者紹介

（執筆順，①所属・職位，②業績，③読者へのメッセージ）

赤星　聖（あかほし　しょう）　**序章・第 2 章・第14章**

①神戸大学大学院国際協力研究科准教授

②「グローバル・ヘルス・ガバナンスにおける「二重の断片化」―― HIV/AIDS，新型コロナウイルス感染症，エボラウイルス病」『国際政治』第211号，2023年。

『国内避難民問題のグローバル・ガバナンスーアクターの多様化とガバナンスの変化』有信堂高文社，2020年。

③国際機構には，政治の前には無力な存在，理想を掲げる組織など多様な考え方があるかもしれません。本書を通して，国際政治の現実を目の前にして，国際機構が取り組んできた，その葛藤や奮闘の軌跡を理解いただけることを願っています。

小林綾子（こばやし　あやこ）　**第 1 章・第 7 章**

①上智大学総合グローバル学部准教授

②『分離独立と国家創設――係争国家と失敗国家の生態』（翻訳）白水社，2024年。

「紛争再発と和平合意」『国際政治』第210号，2023年。

「地球社会と人間の安全保障」滝田賢治・都留康子・大芝亮編『国際関係学〔第 3 版補訂版〕』有信堂高文社，2023年。

③「国連は私たちを天国に導くためではなく，私たちを地獄から救うために創設されたといわれています」（ダグ・ハマーショルド元国連事務総長）という言葉の印象は，本書を読む前と後でどう変わりましたか？　皆さんが本書を通じて国際機構と国際政治を見る目を養えたと思えたら，執筆者としてそれほど嬉しいことはありません。

政所大輔（まどころ　だいすけ）　**第 3 章・第 8 章・第 9 章**

①北九州市立大学外国語学部准教授

②「ロシアによるウクライナ侵攻と『保護する責任』――国際規範の視点から」『国際安全保障』第51巻第 4 号，2024年。

『保護する責任――変容する主権と人道の国際規範』勁草書房，2020年。

“International Commissions as Norm Entrepreneurs: Creating the Normative Idea of the Responsibility to Protect,” *Review of International Studies*, 45 (1), 2019.

③国際機構について学んでもお金にはならないかもしれませんが，社会の見え方が豊かにはなります。

宇治梓紗（うじ　あずさ）　**第 4 章・第12章・第13章**

①京都大学大学院法学研究科准教授

② “Navigating Environmental Cooperation on Air Pollution amid Political Competition in East Asia,” *International Relations of the Asia-Pacific*, 24 (3), 2024.

“The Shadow of History in Inter-Organizational Cooperation for the Environment,” *The Journal of Environment & Development*, 31 (4), 2022.

『環境条約交渉の政治学――なぜ水俣条約は合意に至ったのか』有斐閣，2019年。

③激動の時代における国際機構の「ダイナミズム」に迫った本書が，読者の皆さんがグローバル社会を観察しグローバル課題への処方箋を考えるためのヒントになれば嬉しいです。

松村尚子（まつむら　なおこ）　**第 5 章・第11章**

①神戸大学大学院法学研究科教授

② “Negative Surprise in UN Security Council Authorization: Do the UK and French Vetoes Influence the General Public’s Support of US Military Action?” (with Atsushi Tago), *Journal of Peace Research*, 56 (3), 2019.

“A WTO Ruling Matters: Citizens’ Support for the Government’s Compliance with Trade Agreements,” *Peace Economics, Peace Science and Public Policy*, 25 (2), 2019.

③紙幅の関係で，本書では特に重要な国際機構に関する研究に焦点を当てましたが，他にも多くの研究が存在します。本書を出発点として，最新の学術的な議論や実証研究，それを支えるデータセットや世論調査にも目を向けていただければ幸いです。

大道寺隆也（だいどうじ　りゅうや）　**第 6 章・第10章**

①青山学院大学法学部准教授

②「EU による『押し返し（pushback)』政策の動態―― EU 立憲主義の可能性と限界」『日本 EU 学会年報』第42号，2022年。

『国際機構間関係論――欧州人権保障の制度力学』信山社，2020年。

“Inter-organizational Contestation and the EU: Its Ambivalent Profile in Human Rights Protection,” *JCMS: Journal of Common Market Studies*, 57 (5), 2019.

③国際機構論とは，畢竟，国境を越える世界の諸問題に人類がどう取り組んできたかの学問だと思います。そこにある成功や失敗や課題を，ぜひ「自分ごと」として考えてみていただければ幸いです。